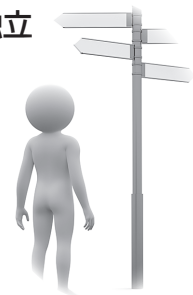
特集　企業内診断士４つの選択――企業内・副業・転職・独立

第５章
【独立】
セカンドキャリアの人は迷わず動こう
中野　大典さん



花岡　貴志
大阪府中小企業診断協会

学生のときから「独立」を念頭に置きながら，24年間サラリーマンとして企業に勤め，診断士資格を取得し，47歳でかねての思いを果たした中野大典さん。

社会人として十分なキャリアを持っていたにもかかわらず，独立のためには診断士資格が必要だったと語る中野さんに，これまでのキャリアと独立後の仕事の内容，そして今後の展望などを伺った。

【中野さんの略歴】
1994年：キヤノン販売株式会社入社
1997年：大手コンサルティングファーム入社
2008年：大手 SIer 入社
2015年：中小企業診断士登録。大手コンサルティングファーム入社
2018年：大阪 IT 経営事務所開設

１．これまでのキャリアの変遷

⑴　生まれ育った大阪で働きたい

大学卒業後は，キヤノン販売株式会社（現：キヤノンマーケティングジャパン株式会社）に入社。千葉県の幕張本社で，SE として外販パッケージソフトウェア製品を作る部署に配属され，期待が膨らむ社会人生活がスタートした。

多くの同期がおり，先輩や上司にも恵まれていたため仕事自体は充実していたが，「大阪で働きたい」という思いが強く，大手コンサルティングファームへ転職した。その後２年間は大阪で働くことができたが，現場が東京になったことを機に転勤を命じられた。

ERP（統合業務支援システム）の導入コンサルタントとして着実にキャリアを積み重ねる中，IT コンサルティング事業を立ち上げる大阪の中小企業を見つけた。面白そうだと感じたのはもちろんのこと，大阪に戻れることが何よりうれしく，転職を決意した。

なぜ，そこまで大阪という地で働くことにこだわるのか。

「大阪で生まれ育ち，実家は東大阪で自営業を営んでいます。すべての起点が大阪なのです。そして，会社に自分の骨を埋めるという意識を持っていなかったことも要因の１つだと思います」

その後，現在も大阪で仕事を続けている。

⑵　診断士資格を取得した理由

診断士資格を取得したのは2015年だが，キヤノン時代にも一度挑戦していた。現在とは違い１次試験が筆記試験であった旧制度での受験は，まったく歯が立たず，自分にはこの資格を取得することは難しいと感じ，その後しばらくの間，資格の存在すら忘れていた。

転機が訪れたのは2008年，前述の中小企業を退社し，大手SIerに勤務することが決まったときだった。これまで一貫してERP導入コンサルタントとしてキャリアを積み重ねてきたにもかかわらず，SIer所属であるために，外部からはコンサルタントとして見られなくなったのである。

どうすればこれまでのキャリアを損なわず，コンサルタントとして見てもらえるのか。診断士試験に再挑戦することを思い立つまで，そう時間はかからなかった。試験制度が変わったこともあり，手の届かなかった資格が身近に感じられた。そして，約５年の歳月を経て１次試験合格をつかみ，登録養成課程を経て2015年に診断士登録をされたのである。

⑶　独立を見据えたキャリア形成

しかし，資格取得後すぐに独立という選択をせず，再びコンサルティングファームに転職。セルフブランディングの観点から，独立する直前のキャリアはコンサルティングファームであることが必要と考えていた。

以前から，資格取得後３年間はコンサルティングファームで勤務し，その後に独立するプランを練っていたのである。

そして2018年，大阪で現在の事務所を開設。独立を果たした。

２．独立という選択肢

⑴　独立はゴールではない

小さい頃，親が脱サラして商売を始めたのを見ていた。自分もそうするものだと思っていたため，「いつか独立したい」という思いは，企業に勤めながらもずっと持ち続けてきた。

同時に，「独立はゴールではない」とも思っていたという。十分なキャリアを持っていたが，診断士資格取得後，すぐに独立しなかったことも，その考えがあったからだ。

しかし，実際に独立する前に一度，独立しようと思ったことがあるという。

「それは，勤務先の社長とけんかをしたときです。周囲にも『自分でやろうかと考えています』という話をしました。そのときは後先のことを考えずに，会社を辞めたから独立と，無計画に考えました。しかし今思うと，踏みとどまって本当に良かったと思います。なぜなら，そのときは次の仕事がまったく見えていなかったからです」

独立すべきタイミングを計ることは難しい。たとえば，目標の貯金額が貯まったときや資格の取得時など，人によりさまざまな考え方がある中，中野さんは独立後にちゃんと仕事が見えていることを独立の条件と設定していたのだ。

⑵　企業内はキャリアと人脈を形成する場

独立してすぐに仕事が見える状況を作っておくことは，そう簡単ではない。中野さんは，どうやってそのような状況を作ることができたのだろうか。これまでのキャリアをひも解くと，企業で勤めていたときの経験と姿勢が，すべてを物語っていた。

最初の大手コンサルティングファームに在職中，最後の仕事となったのは，業界でも有名な海外プロジェクト。前任者から引き継いだときには，大きなトラブルを抱えていた。導入支援をしたERPのソフトの処理が遅く，夜間処理が翌朝までに終わらない，システムがダウンして出荷処理ができないなど，性能問題が起きていたのだ。

つまり，中野さんは火消しの役割としてそのプロジェクトに入ったわけである。担当に就くや否や顧客から多くの指摘を受け，心身ともにつらかったが，指摘の内容自体はもっともであり，我々はやるべきことがやれていなかったという結論に至った。

数々の不備を１年半かけて１つずつ解決していったのだが，その中で生かせたのは過去の経験と人とのつながりであった。

業界でも有名なプロジェクトの火消し業務を完遂したことで，後に転職するコンサルティングファームからも声がかかった。診断士登録後にコンサルティング業界へ復帰するきっかけを作ってくれたのも，かつてのコンサルティングファーム時代の同僚だった。そして独立した今でも，その人脈が仕事につながっている。

⑶　独立に向けて準備していたこと

中野さんの話を伺っていると，独立前に必要なことは「強みを磨いておくこと」，「チャネルを作っておくこと」の２点に集約することができる。

これまでITの分野で仕事を続けてきた中野さんは，独立後もITの世界でやっていくことを考えていた。

「私の専門はITです。そこを踏み外すのはリスクでしかなく，持っている強みを打ち消してしまいます。ですから，独立後もITに関する仕事で勝負するつもりでしたし，ある程度は仕事を取れる自信がありました。手広くやって失敗することは避けたかったのです」

また，独立を検討している人なら誰でも気になる収入面に関して，中野さんは独立直後に無収入の期間が生まれることを避けるため，独立後の顧客先，つまりチャネルづくりに徹してきた。

自身で提供できるサービスが，市場のニーズをつかんでいると独立前から思っていたため，後はチャネルさえあれば何とかなると感じていたのだ。企業勤めでの仕事に対する真摯な姿勢と実績から，自然とチャネルは形成されていったのである。

３．独立後のいま

⑴　独立して得られたもの

現在は，大規模企業向けERP刷新プロジェクトのチームリードを担っている中野さん。受注のきっかけは，やはり過去から形成された人脈によるものだったという。

独立後は昼夜問わず，ほぼ365日稼働しなくてはならないようなイメージがあるが，中野さんはどうなのか。

「サラリーマン時代と変わらないです。むしろ，当時と比べて働く時間を自分でコントロールできるようになりました。サラリーマンの時は上からの指示をこなすことに時間の100％を費やさなければなりません。しかし今は，時間の80％を目前の仕事に，残りの20％を次の仕事のためのネタづくりに充てています。この組み合わせやバランスを，自分で自由に決められることが大きいです」

働くうえで大切にしているものは何かを伺ってみた。

「ある広告会社の行動規範の一つに『仕事は自ら創るべきで，与えられるべきではない』という言葉があります。これについては，仕事をするうえで非常に大事なことだと思っています。私の場合，これを独立後に実践できるようになりました。サラリーマンの環境では，実践はなかなか難しいと思います。独立は，自分で主体的かつ能動的に仕事に取り組めるという面でも良いのです。もちろん，自分でそれだけの責任も負うことは忘れてはいけません」

⑵　診断士資格を駆使して

コンサルタントという肩書きを持つために取得した診断士資格であったが，仕事をする中でも役立つ部分は多いという。

「特に，会計処理や在庫管理などです。販売管理ですと，受注から出荷・請求の一連の流れなどもそうです。診断士資格受験における机上での勉強や，登録養成課程の実習で現場を見られたことも，自分の理解を高める契機になりました」

そのほか，自己紹介の際に中小企業診断士と名乗ると，ITの技術職というだけではなく，マネジメントをしっかり学んでいる人だと評

価されるため，資格はその証明にもなる。

「今後は，もう働けませんというところまで最前線でコンサルティングをやっていたい。必要とされているところで自分のパワーを使いたい」と中野さんは言う。

４．独立を考えている人へ

独立を検討している中小企業診断士にとっては，いつ独立に踏み切ったらよいのか判断に迷うことがある。独立にふさわしいタイミングはあるのだろうか。

「年齢が若い人は，勢いで独立するのではなく，ちゃんと計画を練って，仕事のチャネルづくりをしてからのほうがよいです。しかし，セカンドキャリアの人は，もう背中を押してほしいだけだと思いますので，勢いで独立してもよいと思います。すでに人脈もあるでしょうから。独立後，最初の１～２ヵ月は独立したことを名目に，名刺を配るだけでも仕事のチャネルづくりにつながると思います。独立を考えているのなら，迷わずに動かれたほうがよいでしょう」

中野さん自身，一度独立を検討した際には勢いに任せず踏みとどまったこと，そして満を持して独立して早期に軌道へ乗せることができた経験が，このようなアドバイスにつながっているのだろう。

最後に，独立を検討している中小企業診断士に向けてメッセージを伺った。

「中小企業診断士の働き方には，全方位型と一点特化型があると思います。全方位型はゼネラリストで，一点特化型はスペシャリスト。自身がどちらでいくのか最初に決めたほうが，独立しやすいのではないかと思います。多くは全方位型を目指されると思いますから，そういう方は，診断協会や中小企業診断士の集まりなどでチャネルや人脈を広げていくべきかと思います。

実務補習のときには診断先の業界をいろいろと調べて，コンサルティングをすると思うのです。それと同じで，診断士業界に対して事前調査を行うことが大事だと思います。漠然と資格を取得したから，『よし，独立しよう』だけでは，中小企業診断士として成功しないのではないかと思います。

診断士資格を生かせていない方がいるならば，さまざまな機会を得て診断実務をやるべきだと思います。職場の事情で副業が難しい方もいらっしゃると思いますが，その場合は，会社内に診断士資格が生かせる部署を作ることも一つの方法だと思います」

中野　大典
（なかの　だいすけ）

大阪府大阪市生まれ。大手企業でSE，大手コンサルティングファームでコンサルタントとして従事。2015年中小企業診断士登録。大阪IT経営事務所代表。基幹系情報システム（ERP）の導入コンサルティングに強みを持ち，大企業のみならず中小企業へのITに関するアドバイスを行っている。兵庫県立大学大学院MBA修了。

花岡　貴志
（はなおか　たかし）

兵庫県神戸市生まれ。小売店や飲食店の立地選定や売上予測，店舗デザインなど店舗の出店にかかわる業務に従事。2019年中小企業診断士登録。現在は中小企業診断士として，経営改善計画の策定支援や補助金申請支援を行う傍ら，創業や補助金に関する執筆活動を行っている。宅地建物取引士，ファイナンシャルプランナー。